

chapter.06

一切経音義全文データベースの構築と研究

李乃琦

1. はじめに

げんのう いっさいきょうおんぎ
玄応撰『一切経音義』(以下、「一切経音義」と略す)は中国に現存する最古の仏典音義である。唐代に玄奘はインドから大量の仏典を将来した。それらの仏典を翻訳するために、長安に「訳場」を設け、僧侶の中から知識人を選んだが、その中でも玄応は唯一の「字学大徳」であった。玄応は仏典に難字難語が多数存在することを意識し、仏典翻訳に並行して「一切経」の音義の編纂を行った。それがいわゆる一切経音義であり、全25巻で約400,000字、400部以上の仏経経目と9,000以上の項目が収録されている¹⁾。一切経音義は後代の仏典音義に大きな影響を与えた。その影響は中国にとどまらず、奈良時代に日本に伝来して盛んに書写され、平安時代以降の辞書編纂²⁾に際しては頻繁に利用された。日本に現存する一切経音義古写本は残巻数と内容において多少異なるものの、いくつかの系統に分けられると想定される。本論文では、この問題を解決するために、「一切経音義全文データベース」の構築とそれによる研究について論じる。

2. 先行研究

①山田(1932)は日本古写本の^{だいじ}大治本が宋版系ではなく、高麗本系であることを指摘した。さらに巻第一について諸本対照結果を示し、大治本には高麗本系よりも古い一切経音義の本文が残っていることを明らかにした。

②上田(1981)は一切経音義の日本古写本(大治本、正倉院本、広島大学所

蔵本、天理図書館本、高麗蔵経本）と中国版本（^{せきしゃ}磧砂蔵経本、叢書集成所収本、^{えりんおん ぎしよきよぼん}慧琳音義所拠本）とを比較し、日本の諸本は、中国の版本とは別の系統に属することを明らかにし、日本独自の系統がある可能性を示唆した。

③箕浦（2006）は金剛寺本・七寺本・東京大学本・西方寺本の書誌情報について説明している。その中では金剛寺本が大治本に近く、七寺本が高麗本に近いことを指摘した。また西方寺本がほかの写本より石山寺本に近いことも指摘した。ただし、上にあげた諸本の親疎関係については特に根拠を示していない。

④徐時儀（2009）『玄應和慧琳の「一切経音義」研究』は、日本に現存する一切経音義古写本の系統を検討した。収録された経目においては、金剛寺本・七寺本・西方寺本が高麗本と同じ系統であり、注文においては、七寺本が高麗本に近く、西方寺本・金剛寺本が磧砂本に近いと論じた。また、徐氏は元々^{かい}開^{ほう}寶蔵初刻本と契丹蔵とのあいだに一種類の一切経音義古写本が存し、日本現存の写本はその古写本に基づいてできたものであると論じた。その上で、西方寺本・金剛寺本が先に成立し、その後、高麗本と七寺本がそれらを^{ななつでら}底本として編集されたと論じた。筆者は日本古写本の系統については研究途上であるが、徐氏の研究結果には再考の余地があると考えている。

⑤佐々木（2014）は2006年に公開された五種類の写本も含めた一切経音義巻第五における本文と目録との経名不一致について論じ、現存する一切経音義巻第五の経名から見た場合、日本古写本は高麗本に近く、宋版はそれと遠いことを指摘した。さらに、現存する巻第五に、目録と本文の経名とが一致するものはないことについて、各巻目録が音義本文と独立して書写されたためと説明づけた。

以上、これまでの研究により、一切経音義の日本写本と中国版本が別々の系統に属することが明らかになった。また、個別の巻の系統分類については、これらの先行研究により解明されたが、ほかの巻も含めた一切経音義日本古写本全体を対象とした系統分類は未解決のままである。本論では、「一切経音義全文データベース」を構築し、それらの問題点について検討する。

3. 『一切経音義』日本古写本

3-1. 現存する一切経音義日本古写本

本論では、完本である高麗本と日本に現存する一切経音義古写本を研究対象とする。利用している諸本は次の通りである。

- (1) 高麗本：(全 25 巻。『高麗大蔵經』、東国大学校、1976 年。)^{*3}
- (2) 金剛寺本：金剛寺蔵本（鎌倉時代書写。巻第一～四、六、七、九～二十一、二十四、二十五の 21 巻が現存する。）
- (3) 七寺本：七寺蔵本（平安時代書写。巻第一～十、十二～十四、十六～十八、二十一、二十三～二十五の 20 巻が現存している。また、巻第十五は東京大学史料編纂所に所蔵されているので、合わせて 21 巻現存する。）
- (4) 大治本：宮内庁書陵部蔵本（大治三年書写。巻第一、二、九～二十五の 19 巻が現存する。）
- (5) 西方寺本：西方寺蔵本（鎌倉時代書写。巻第一、三～六、九、十三、二十一、二十五の 9 巻が現存する。）
- (6) 広島大学本：石山寺旧蔵本（平安時代書写。巻第二～五、十の 5 巻が現存する。）
- (7) 天理図書館本：天理図書館蔵本（巻第九、第十八現存する。巻第九が院政期の写本、石山寺本の一部である。巻第十八が鎌倉時代の写本である。）
- (8) 京都大学本：石山寺旧蔵本（巻第六、七が現存する。石山寺本の一部である。）
- (9) 東京大学本：七寺本旧蔵本（巻第十五のみ現存する。七寺一切経の一部である。）

ほかに、正倉院本一切経音義（正倉院聖語蔵本）を参考資料とする。以上により、現存する一切経音義古写本の残巻数は【表 1】のように示される。

3-2. 一切経音義日本古写本の独自性

①増訂

例 1 <習しゅうしゅう習> 巻第二 大般涅槃經^{*4}

經文從𠂔作瘡、書無此字、近人迦之耳。（高麗本・七寺本・広大本）

經文從𠂔作瘡、書無此字、近人加之耳。和言加由之。（金剛寺本・大治本）

表 1 利用した九種類の一切経音義の現存巻数対照表

巻	高麗本	金剛寺本	七寺本	大治本	西方寺本	広大本	天理本	京大本	東大本
1	○	○	○	○	○				
2	○	○	○	○		○			
3	○	○	○		○	○			
4	○	○	○		○	○			
5	○		○		○	○			
6	○	○	○		○			○	
7	○	○	○					○	
8	○		○						
9	○	○	○	○	○		○		
10	○	○	○	○		○			
11	○	○		○					
12	○	○	○	○					
13	○	○	○	○	○				
14	○	○	○	○					
15	○	○		○					○
16	○	○	○	○					
17	○	○	○	○					
18	○	○	○	○			○		
19	○	○		○					
20	○	○		○					
21	○	○	○	○	○				
22	○			○					
23	○		○	○					
24	○	○	○	○					
25	○	○	○	○	○				
計	25	21	20	19	9	5	2	2	1

②系統の異同

例2 <牛^{ぎゅうけん} 𦍋> 卷第四 大灌頂經

居院反。『字書』：𦍋、牛拘也。今江淮以北皆呼牛拘、以南皆曰𦍋。（高麗本・七寺本）

居院反。『字書』：𦍋、牛拘也。（西方寺本・広大本・正倉院本）

居院反。『字書』：拘也。（金剛寺本）

以上のように、一切経音義日本古写本には巻ごとに残巻数、内容ともに大きな差があるので、全体的に検討するのは不適切だと思われる。そのため、以下では、「一切経音義全文データベース」の構築により、検討する。

4. 「一切経音義全文データベース」の構築

4-1. データベース構築の必要性

一切経音義は「巻音義」、すなわち、仏経の一部ずつ、難字難語に注を加えたものである。そのため、仏経を熟知していない読者にとっては、検索するのが困難である。それを解決するために、現在一切経音義の情報学的な研究成果が多くある。それらの検索サイトは次の通りである。

①漢学文典（玄応『一切経音義』、徐時儀校注）

<http://tls.uni-hd.de/xuanying.html>

②仏典辞書数位検索系統（玄応『一切経音義』、慧琳『一切経音義』、希麟^{きりん}『一切経音義』）

<http://cprg.esoe.ntu.edu.tw/cyj/index.py>

③仏教五台山在線（慧琳『一切経音義』）

<http://www.chinawts.com/index.html>

④SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース（慧琳『一切経音義』）

<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/>

以上の検索サイトはすべて一切経音義の利便性を高めるために開発されたもの

のである。しかし、いままで公開されたデータベースはすべて一切経音義の版本と慧琳音義についてのものである。管見の限り、一切経音義の写本に関するデータベースは見当たらない。なぜ、一切経音義の写本のデータベースを構築しなければならないのか、次に一例をあげる。

例3 <治^{ちしゅう}菴> 卷第三 勝天王般若經

七入反。『通俗文』：覆蓋曰菴。菴亦補治苦也。（磧砂本）

七入反。『通俗文』：覆蓋曰菴。菴亦補治苦也。（高麗本・七寺本）

子立反。『通俗文』：覆蓋曰菴。菴亦補治也。累也。苦也。（金剛寺本・西方寺本・広大本）

この例では、版本である磧砂本・高麗本と写本である七寺本の注文が一致する。しかしながら、古写本である金剛寺本・広大本・西方寺本の注文において、反切は他本の「七入反」と異なり、「子立反」である。さらに、注文に「累也。苦也。」の記述は金剛寺本・西方寺本・広大本にしか見られない。そのため、現在公開されている一切経音義のデータベースを利用して、一切経音義日本古写本を検索するのは、不適切だと思われる。

一方、一切経音義全25巻（高麗本）には約9,000の項目がある。そのほかに、九種の古写本がいずれも残巻であるが、合わせて103巻分が存する。これは、膨大な文字量を持つ文献だと言えるだろう。さらに、諸本間には一致する内容が大半を占め、それ以外の異文は多様な形式で残されている。文献の量的な面から言っても、また諸本間の比較を効率的にしても、データベースを構築することを避けて一切経音義の研究を行うことはできない。

本論では、九種の一切経音義日本古写本を分析するに際して、古写本の全文テキストを電子化し、「一切経音義全文データベース」を構築する。これにより、複数の写本を個別に分析ができるし、さらに、諸本を並行的に比較するのも可能になった。

4-2. データベース構築原則

「一切経音義全文データベース」の構築については、次のような原則に沿っ

て進める。

- ①データベースの構築範囲は一切経音義巻日本古写本の諸本とする。
- ②項目配列は、一切経音義での出現順とする。
- ③所在は、頁数・行数を算用数字で表す。

データベースの構築に際して、次の手順で行う。

- ①いままで公開された写本を利用し、^{ほんじ}翻字する。
- ②翻字したテキストが Excel で処理する。
- ③ Excel を根幹資料として、データベースの形式に整える。

4-3. データベースの項目構成

一切経音義の編纂形式について、小林（1981）は次のように述べている。

初唐の一切経五百五十部について、各経ごとに所出順に字句を抽出して挙げ、それぞれに音注、義注及び字体注を加えたものである。

一切経音義各巻の最初に「一切経音義巻第〇」の形式で巻を表し、その後の目録で、この巻に各経に配された経目名の全体を見渡せる。その後の本文に各経の経目名・掲出語・注文が続く構成になっている。

巻第十八を例として、巻のはじまりには「一切経音義巻第十八」とある。それに続き、巻第十八に収録した経の経目名の目録がある。本論では、それらを各経の経目という。各経の経目は「成實論、轉婆沙阿毗曇論、解脫道論、雜阿毗曇心論、立世阿毗曇論、尊婆須蜜所集論、法勝阿毗曇論、四諦論、阿毗曇心論、分別功德論、甘露味阿毗曇論、辟支佛因緣論、三法度論、十八部論、明了論、隨相論」である。

その後は、本文の経目名からはじまり、最初の本文経目名は「^{じょうじつろん}成實論」である。その後、巻第十八の最初の項目をあげる。

例4 <斲^{たくふ}斧> 卷第十八 成實論卷第一

古文作𣪠、同。竹角反。『説文』：斲、斫也。斲、斤也。

この例では、傍線部分が字体注、波線部分が音注、二重傍線部分が義注である。それらの要素をまとめ、次の通りである。

【一切経音義の巻目】：各巻の最初に巻目を示す。一切経音義の場合は、一から二十五までである。

【各経の経目】：一切経音義の一巻にはいくつかの仏典が含まれている。それらの経の名称である。

【各経の巻目】：各経もいくつかの巻に分けられており、それらの巻についても巻目で示す。

【所在】：本論では、一切経音義の掲出語と注文を組み合わせたものを「項目」という。この所在とは、項目が記載されている頁数・行数である。

【掲出語】：仏経から抽出され、解釈を付される難字難語のことを指す。

【注文】：掲出語に施された注釈文であり、字体注・音注・義注^{*5}がある。

4-4. 一切経音義資料表の要素

以上の要素をもとに「一切経音義全文データベース」の資料表【表2】を作成する。ここで、「^{ちゅうちやう}偈張」（巻第四）を例として、資料表の構成を示す。

例5 <偈^{ちゅうちやう}張> 巻第四 觀佛三昧海經

『説文』作譌、同。竹流反。『爾雅』：偈張、誑也。亦幻惑欺誑也。經文作輶、車輶也。輶非字體。『春秋傳』：挾輶以走。（高麗本系統）

『説文』作譌、同。竹流反。『爾雅』：偈張、誑也。亦幻惑欺誑也。經文作輶、車輶也。輶非字體。（金剛寺本系統）

以上のように、ある項目を処理するために、いくつかの部分に分け、情報を別々に記入する。それにより、多方面から写本の比較と整理を可能にする。

次の【表3】では、一切経音義各本のIDについて説明する。各本のIDは次

表 2 七寺本一切経音義資料表

ランク	内容	例
ID	古写本の略称と所在頁数・行数	YND062004
巻	一切経音義に所属する巻	巻第四
経目名・巻	この項目が出典する経目名と巻数	觀佛三昧海經・巻第二
項目（高麗本）	高麗本を基準として、高麗本と異なる項目があれば、古写本で出現した項目で補足する	俯張
項目（古写本）	掲出語	俯張
所在	古写本での所在頁数・行数	620 頁 4 行目
注文	高麗本を基準として、高麗本と異なる内容を <q></q> で明示する。	『説文』作譌、同。竹流反。『爾雅』：俯張、誑也。亦幻惑欺誑也。經文作輶、車輶也。輶非字體。<q>『春秋傳』：挾輶以走。</q>

表 3 一切経音義各本の ID 対照表

ID	内容	例
高麗本の項目		俯張
YKR	高麗本 ID	YKR042119
YND	七寺本 ID	YND062004
YKG	金剛寺本 ID	YKG009516
YSH	西方寺本 ID	YSH124003
YHD	広島大学本	YHD017406
YSS	正倉院本	(空)
YTR	天理図書館本	(空)
YTD	東京大学本	(空)
YKD	京都大学本	(空)

の三つの部分に分けられる。Y は一切経音義の略称である。続く二つのアルファベットは各本の日本語読みの略称である。6 桁の数字は前の 4 桁が項目の所在頁数であり、後の 2 桁が行数を表す。

5. 「一切経音義全文データベース」の活用

5-1. 『一切経音義』についての研究

一切経音義の構成により、経目名と本文との系統分類を各自に試みた。その結果、一切経音義日本古写本を三つの系統に分けた。すなわち、高麗本系統【高麗本、七寺本 A】、大治本系統【大治本、金剛寺本、七寺本 B】、石山寺本系統【石山寺旧蔵本（広大本、京大本、天理本巻第九）、天理本巻第十八、西方寺本】である。一方、七寺本は各巻によって系統が異なり、七寺本の書写形式と合わせて検討した結果、七寺本が取り合わせ本であることを解明した。

5-2. 日本古辞書との照合

日本辞書編纂の萌芽時代である平安期では、参照が可能である資料が限られていた。それらの資料では、中国からもたらされた文献が少なくない。そのため、日本辞書の源流をさかのぼる際に、中国文献の検証を避けることはできない。

それにより、中国文献の利用という視点から、日本古辞書についての考察を試みる。古辞書といえば、平安時代漢和辞書の双璧として広く知られているのは新撰字鏡じきやう るいじゆみやう ぎしやうと類聚名義抄である。新撰字鏡は現存する日本最古の漢和辞書であり、最初に一切経音義を利用する利便性を目指して成立したものである。その後編纂された類聚名義抄は平安時代の音義書を集大成するものであり、130種以上の出典が明記され、多数の文献を利用したことがうかがえる。その中で引用数が最も多いのが一切経音義である。よって、この両者の共通点として、最初に注目すべき点は一切経音義の利用である。

すでに分類した一切経音義日本古写本の各系統を類聚名義抄と照合し、異文の内容について分析した上で、各系統の独自異文が類聚名義抄に見られることがわかった。各系統と類聚名義抄との対応する項目数とその中の不一致する項目数を統計した。その結果、不一致率の順が高麗本系統＞石山寺本系統＞大治本系統である。これによって、類聚名義抄が編纂されたとき、利用された一切経音義は大治本系統に最も近いことがわかった。

一切経音義と新撰字鏡との照合を行う場合、新撰字鏡注文の出典が明記されていないため、一切経音義の独自注文がある独自項目を取り上げて比較した。

その結果、新撰字鏡の依拠本は高麗本系統に近いことがわかった。

5-3. 『一切経音義』敦煌吐魯蕃断片群

同じ写本である一切経音義の敦煌・吐魯蕃断片群に着目し、それらについての先行研究と現存する断片群の目録をまとめた上で、研究対象を決めた。それは、断片群の中で、項目数が最も多い P.2901 と、前後の書写形式が異なる ø 230 である。その後、両者を別々に一切経音義日本古写本との比較を行った。それにより、敦煌・吐魯蕃断片群の独特の編纂方針が明らかになった。

6. 今後の課題

6-1. 玄応音義古写本の調査

本論で対象外とした一切経音義古写本の調査を行う必要がある。本論で検討した諸本以外、日本に所蔵されている写本は興聖寺蔵本、大東急記念文庫蔵本、名古屋市博物館蔵本、中尊寺蔵本、東禪寺蔵本である。

6-2. 日本古辞書との関連性研究

本論では、平安時代に成立した類聚名義抄と新撰字鏡とのそれぞれについて、一切経音義との関連性に関する研究を行った。いままで、院政期鎌倉初期頃に成立した世尊寺本字鏡が新撰字鏡と類聚名義抄と関係があることはすでに指摘された。この中で、一切経音義と一致する注文も存することが確かめた。これから、一切経音義と世尊寺本字鏡との照合を行う必要がある。

6-3. 一切経音義敦煌・吐魯蕃断片群の調査

各国に所蔵されている一切経音義の敦煌・吐魯蕃断片群の原本調査は、大英図書館所蔵本、フランス国立図書館蔵本を調査したのみであり、ドイツ・ロシアなどに所蔵の原本を調査する必要がある。

6-4. 慧琳音義の玄応撰部分の検討

一切経音義の祖本^{そほん}に近い日本古写本についての研究は本論で行ったが、それ

らを検討するとき、問題になる部分だけ慧琳音義の玄応撰部分を利用した。慧琳音義の玄応撰部分の真実性と分量がいまだに不明であるので、これから、全体的な検討を課題とする。

注

- 1 徐時儀『玄応「衆経音義」研究』（中華書局、2005年）
- 2 池田証壽「図書寮本類聚名義抄と玄応音義との関係について」（『国語国文研究』88号、1991年）
- 3 一切経音義日本古写本はいずれも残巻なので、本論では、完本である高麗本（版本）も研究対象とする。また、『高麗大蔵経初刻本輯刊』（西南師範大学出版社・人民出版社、2012年）を参考資料とする。
- 4 本論では、玄応音義からの引用に当たって、原文の字体を用いることを原則とする。論文の引用に当たって、康熙字典体で書かれた日本語論文は常用漢字体に改めることとしたが、一部は原文のままにした。中国語論文は原文のままにした。中国人名のように姓だけではわかりにくい場合は、敬称を省略し、姓名を記す。
- 5 義注には和訓も見られる。

参考文献

・ 古籍

- (1) 高麗蔵経本：『高麗大蔵経』、東国大学校、1976年
- (2) 名古屋七寺蔵本・大阪金剛寺蔵本・西方寺蔵本・東京大学蔵本・京都大学蔵本：『日本古写経善本業刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五卷」』国際佛教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集発行、2006年
- (3) 広島大学蔵本・大治三年本・天理図書館本：『古辞書音義集成「一切経音義」』、汲古書院、1981年

・ 著書・論文

- 池田証壽（1991）「図書寮本類聚名義抄と玄応音義との関係について」『国語国文研究』88号
- 上田正（1981）「玄応音義諸本論考」『東洋学報』第63巻第1・2号
- 于亨（2007）「玄応『一切経音義』版本考」『中国典籍与文化』4号
- 小林芳規（1981）「一切経音義解題」『古辞書音義集成「一切経音義（下）」』付載
- 佐々木勇（2014）「玄應撰『一切経音義』巻第五における本文と目録との経名不一致について」『訓点語と訓点資料』第133輯
- 徐時儀（2005）「玄応『衆経音義』研究」中華書局
- 徐時儀（2009）『玄應和慧琳の「一切経音義」研究』上海世紀出版集團
- 張娜麗（2006）「京都大学文学部国語学国文学研究室蔵玄応撰『一切経音義』について」、

- 『日本古写経善本業刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五卷」』国際佛教学大学院大学
学術フロンティア実行委員会
- 山田孝雄（1932）「一切経音義刊行の顛末」『一切経音義 二十五卷』西東書房
- 箕浦尚美（2006）「金剛寺・七寺・東京大学史料編纂所・西方寺蔵玄応撰『一切経音義』
について」『日本古写経善本業刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五卷」』国際佛教学
大学院大学学術フロンティア実行委員会
- 李乃琦（2016）『図書寮本「類聚名義抄」における玄応撰「一切経音義」の依拠テキ
スト―「一切経音義」卷第四を中心に―』『訓点語と訓点資料』第137輯
- 李乃琦（2016）『玄応音義に関する研究史と課題』、『北海道大学大学院文学研究科研
究論集』第16輯
- 李乃琦（2017）『玄応撰「一切経音義」諸本系統から見た P.2901』『汲古』第72号
- 李乃琦（2018）『一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての
実証的研究』北海道大学大学院文学研究科博士学位論文

本稿は拙稿

「一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究」北
海道大学大学院文学研究科博士学位論文、2018年

「一切経音義全文データベースの構造化」『じんもんこん 2018 論文集』、2018年（共著：
劉冠偉）

の内容を基に修正・加筆を施し一論文として統合したものである。